

人前化粧における意識

岡山大学大学院社会文化科学研究科

塩田真友子

目的・背景

近年、電車の中などの公共の場において化粧をするという行動が頻繁に見られるようになり、その是非が取り沙汰されるようになった。そして、それに関する調査も行われるようになったが、そのような行為の当事者の意識や、その観察者の意識について心理学的に統制した調査を行った研究は少ない。

そこで本研究では、電車の中という公共の場での化粧行動について行為者、観察者の意識をそれぞれ検討した。

結果・考察

研究 1 では、公共の乗り物の中で化粧をするかしないかという質問に対する回答を従属変数に、仮想的有能感（速水，2006），行動基準（菅原・永房・佐々木・藤澤・薊理，2006），恥意識（永房，2000），公的自意識（菅原，1984），他者意識（辻，1993），対人志向性（斉藤・中村，1987）の 6 つの尺度を独立変数として相関係数を算出し、公衆場面での化粧行動を規定する要因を検討した。その結果、公的自己意識 ($r=.234, p<.05$)，外的他者意識 ($r=.190, p<.05$)，普段の化粧頻度 ($r=.243, p<.01$) との間に弱い正の相関が見られた。この結果より、公的自意識が高い、つまり自己の外見や言動に向ける注意が高い人、外的他者意識が高い、つまり他者の外見に対する関心が高い人、普段の化粧頻度が高い人ほど公衆場面において化粧行動をすることが示された。しかし、本研究で設定した仮想的有能感や行動基準、恥意識と公共の乗物での化粧行動との相関は見られなかった。この結果より、大学生においては人前で化粧をすることと、公共マナーを重視することや恥ずかしいという意識、無条件に他者を軽視する意識とは関係がないということが示された。

研究 2 においてはそのような行為の観察者の意識について検討した。その際、行為者の世代、化粧の程度を考慮した。具体的には、行為者の世代については、調査対象者である大学生より下の世代である高校生、同世代である大学生、上の世代である 30 代の 3 条件を、程度については簡単な化粧直し、フルメイクの 2 条件を設定した。つまり、6 場面を想定しそれぞれに対し、「不愉快な気分になる」、「よい感じがしない」、「マナーが悪いと思う」、「恥ずかしいことだと思う」、「面白いと思う」、「あまり気にしない」の 6 つの質問項目について「1：全くあてはまらない」から「5：よくあてはまる」の 5 段階評定を求め評定を求め、行為者の世代、化粧の程度による観察者の意識の差異を検討した。その結果、化粧の程度については、一貫して化粧直しよりもフルメイクの方が否定的に評価されていた。世代については、自分と異なる世代よりも同世代の行為者に対して評価が寛容であること、自分と異なる世代においては、下世代よりも上世代に対してより否定的評価がなされるという傾向が見られた。

菅原（2005）によると、“若者たちが恥ずかしいと感じるのは、“若者らしくない姿

や行動”である”という。電車の中で化粧をするという行動が“若者らしい行動”と捉えられているならば，本研究の結果は妥当であると考えることができる。すなわち“若者らしい行動”をするべきではないと感じた上世代の行為者に否定的評価を下したと考えられる。研究1についても，行為者にとっては当該の行動は“若者らしい行動”であるため恥ずかしいとは感じなかったと考えることができる。